

今回は、稲盛和夫さんの「生き方」からです。

物事をなすには、自ら燃えることができる「自燃性」の人間でなくてはなりません。私は、この事を「自ら燃える」と表現しています。ものには三つのタイプがあります。①火を近づけると燃え上がる可燃性のもの。②火を近づけても燃えない不燃性のもの。③自分で勝手に燃え上がる自燃性のもの。人間のタイプでも同じで、周囲から何も言われなくても、自らカッカと燃え上がる人間がいる一方で、まわりからエネルギーを与えられても、ニヒルというかクールというか、さめきった態度を崩さず、少しも燃え上がらない不燃性の人間もいます。能力は持っているのに、熱意や情熱に乏しい人といってもいいでしょう。こういうタイプはせっかくの能力を活かせずに終わる事が多いものです。

組織的に見ても、不燃性の人間は好ましいものではありません。自分だけが氷みたいに冷たいだけならともかく、時にその冷たさが周囲の熱までも奪ってしまう事があるからです。ですから私は、よく部下に言ったものです。「不燃性の人間は、会社にいてもらわなくても結構だ。君たちは、自ら燃える自燃性の人間であって欲しい。少なくとも、燃えている人間が近づけば、一緒に燃え上がってくれる可燃性の人間であってほしい」物事をなすのは、自ら燃え上がり、更にそのエネルギーを周囲にも分け与えられる人間なのです。決して他人から言われて仕事をする、命令を待って初めて動き出すという人ではありません。いわれる前に自分から率先してやり始め、周囲の人間の模範となる。そういう能動性や積極性に富んでいる人なのです。

では、どうしたら自燃性の人間になれるのでしょうか。自ら燃える体質を獲得するにはどうしたらいいか。その最大にして最良の方法は、「仕事を好きになる」ことです。好きこそ最大のモチベーションであり、意欲も努力も、ひいては成功への道筋も、みんな「好き」であることがその母体になるという事です。「ほれて通えば千里も一里」「好きこそもの上手なれ」といいならわされてきたとおり、好きであれば、自然に意欲もわくし努力もするので、最短距離で上達していく。人から見れば大変な苦労も、本人には苦どころか、楽しみとなるのです。私は、仕事仕事でろくに家にもいないので、家内などは「おたくの御主人はいつ帰ってこられるのか」と近所の方から心配されたり、田舎の両親からも「そんなに働いて体を壊してしまいますよ」という忠告の手紙が届いたことがありました。しかし当の本人は案外平気で、好きでやっている事だから、辛くもなければ、さほど疲れも感じていませんでした。実際にそこまで仕事を好きにならなくては、大きな成果を残す事はできないのです。どんな分野でも、成功する人というのは自分のやっている事に惚れている人です。仕事をとことん好きになれ—それが仕事を通して人生を豊かなものにしていく唯一の方法といえるのです。

Q 1 : 稲盛さんは、どんな人間が物事をなすと言っていますか？

A 1 : ()

Q 2 : あなたは①～③のどのタイプですか？③はどうすれば変わるとおもいますか？

A 2 : ()